



CONTENTS

真夏の放課後

からかさのコ

3

遮光のクサリ

兄ちゃんイチバン！

めぐりあひ

★この作品はフィクションです。実在の人物・団体・事件などにはいっさい関係ありません。

からかさのこ

そんな——そんなつもりじゃなかった。

ジュプジュプジュプ。

濃厚な吸着音につつまれながら、

桃色の世界のなかで、ゆらりゆらりと踊り続ける。

抵抗したい。

でも、ダメだ——。

きもち、よすぎるっ。

おれの熱を、やさしくそして強く包み込んでくれる彼女——

いや、『^{かれ}彼』を——。

おれは、どうして受け入れてしまったのか。

それはきっと——。



桜が散り、春がもうじき終ろうかというとき——

おれは、はじめて恋をした。

友人と下校途中にみかけたひとりの少女。

道路をはさんで、むかいがわでひとり立ち尽くしていた。

べにいろ かすり 紅色の 紺。淡い 緑の 帯。すみぞ げ た 墨染めの 下駄。

潤沢な黒髪。ひすいいろ かみど 翡翠色の 髪留めがきらりと光る。

こさめ 小雨が降っていたので、からかさ をさしていた。

だれかを待っているのか、彼女のからだは左右になんども振っていた。

「おい、見ろよ、この時代にあんな古臭エきもの着てるぜ」

「ほんとだ、どこの○学生だ？傘がジャマでみえねえ」

しばらくすると、くいと傘があがり、その子のかおがよくみえた。

どくんっ——。

刹那——おれのとりまく世界は、

なぜか白いユリの花一面にひろがった。

そのきれいなユリのなかに、彼女の清純そうな藤色の瞳が映える。

心臓がバクバクとはげしく無造作にリズムを刻みはじめた。

もしかして——これがほんとの『ひとめぼれ』か。

「どうした、おい、ワタル！」

おれの世界が、友人の手によって幻影となっけえうせた。

我に返ったおれを、友人はいじわるくからかいはじめた。

「おまえ、もしかしてあの子にホれたのか？」

「マジかよ。あんなのに興味あったんだ」

おれはとっさに「ち、ちげえよ」と否定した。

ひとめぼれしたことを隠したかったのだ。

友人たちがわらいながらふたたび歩みはじめ、おれもあとを追うように歩みはじめた。

だがもう一回、彼女の顔を見てみたくなり、向かいに目を向けたが——

すでに彼女は消えていた。



運命^{うんめい}なんて、信じないタチだった。

すべては偶然^{ぐうぜん}による一致^{いっち}なのだと――

そう思いたかった。

ちいさな春雨を全身にあびながら、公園通りの参道で、

ふたたびあのときの彼女をみかけた。

このまえとおなじ恰好である。

彼女は参道に並ぶベンチでひとり、手元を動かしてなにかをしていた。

かさが邪魔^{じやま}でよくみえない。

声をかけるべきか、こんなチャンスはめったにないんじゃないだろうか。

そうこう悩んでいると、神さまというやつはたいへんなことをしてくれる。

小雨^{こさめ}が降るなか、とつぜん向かいから突風がからだをうちつけた。

ふと見ると、おれの足元からかさが落ちていた。

反射的にかさを取った。そしてとっさに――彼女のほうへ顔を上げる。

あわい藤色の瞳が――じっとおれを見つめていた。

おれは歩み寄り、かさを手渡す。

「ありがとうございます。たすかりました」

鈴すずの音を転ねがすような澄んだ声だった。

「あ、いえいえ」

少々の間を置き――

「あの――なにをしてらっしゃったんですか？」

心臓がのどから飛び出しそうだった。

いまさらながら、どうしてあんな質問をしたのだろうかと疑問に思う。

彼女の足元には、ちいさな“折り鶴おづる”がおちていた。

「かわいいですね」

おれは折り鶴を彼女の手のひらに乗せた。

「ありがとう。わたし、むかしから折り鶴つくるのが好きなの」

潤沢なあわい光りをおびながら、彼女の視線は折り鶴に向かっていた。

「へえ。いいですね。あの、このあたりじゃ見ないですが――どこの学校に通ってらっしゃるんですか」

「わたし、心臓が弱いから、病院通いなの。だから学校には行ってない」

「そうなんですか。ごめんなさい」

「いいの」

余計なことを口走った。気まずい空気にならないうちに退散しよう。

彼女とはなしができただけでも、充分だ——とおもった。

「それじゃ、ぼくはこれで」

「ちょっと待って」

「はい」

「あなた——このまえ学校の校門でわたしを見てたでしょ？」

彼女からのおもいがけない問いかけに、おれははっとなった。

「どうして、それを？」

「わたしも——あなたを見てたから」

はるきめ
春雨もやみ、やわらかなひざしが笑顔とともにおれたちを照らした。



おおきな空間には、すこし薬品のにおいが鼻を突いた。

「やっと病院から家に移されたけど——まだいろんな機具つけられたまんま。ヤんなっちゃう」

彼女の部屋は、部屋というにはよほどあきたりすぎるほど広かった。

どこか名のある^{ぶいごう}富豪の娘なのだろうか——そんなことも考えてみる。

かけられた古時計がこつこつと鳴る。

心地よいメトロノームとは裏腹に、^{はやがね}早鐘をならす心臓をおさえながら、おれは衝動的に口走った。

「あの、じつは、おれ——あなたをひとめみたときから・・・」

すると彼女が、きゅうに人さし指をおれの口へとくっつけた。

彼女の瞳が——すこしするどくなつたようにおもえた。

眼光も、おれ一点をみすえている。

髪留めをほどくと、さらりと漆黒の黒髪がゆれた。

刹那——おれをひきよせ、そっとくちづけをする。

「んんっ！！////」

じつは、これがはじめてのキスだった。

彼女のちいさなくちびるは、ほんのすこし冷たい。

とつぜんのできごとに、あたまは真っ白になった。

だが、抵抗することもできず、彼女はさらにはげしくくちづけをする。

ちゅぷ——くちゅっ。

いちどくちびるをはなすと、おれと彼女のあいだに光の糸がつながった。

「はじめて？」

なんだか彼女が、妖艶ようえんなサキュパスにみえたのは気のせいだろうか。

それでもよかった——彼女を抱けるのなら。

「○学生どうし——まだはやいよ」

やりかたはなんとなく知っている。ただそんなことしたこともない。

「それ、抵抗してるつもり？」

彼女はおもむろに着物を脱ぎはじめ、白い襦袢じゅばんすがたになると、エッチな感情がおしよせてきた。

暗幕あんまくが広がり、つづいて桃色の世界がいっきに咲いた。

彼女は襦袢すがたのまま、ふたたびおれのからだを抱き寄せキスをした。

そのうち、彼女はおれのあそこに手を伸ばした。

「そ、そこはッ・・・」

「こわい？」

耳元で、彼女のちいさなコトバが揺れた。

「う——ううん」

彼女はさらにさすりはじめる。だんだん熱とともにそりたってきた。

「もう、むけてるの？」

「え？うん。ちっちゃいときに手術したから」

「ふーん。じゃ、手入れしなくてもだいじょうぶだね」

一気にズボンとパンツをおろし、しこしこしはじめた。

「おっきいね——おとなになったら、もっとおっきくなるのかな」

「ど、どうだろう」

「ねえ——わたしのも、触って？」

おれは、高鳴る鼓動をおさえながら、彼女の胸に手を添えかけた。

「そっちじゃなくて——した」

「えっ」

おれはひとりっこで父子家庭だったから、女性のあそこは見たことがない。

「触るよ？」

「うん」

襦袢のおくから手を突っ込んだ。

やわらかなふとももをゆくりと伝い、下着のうえに手を置いた。

「？」

あアっ——と彼女がちいさく声を漏らした。

だが、おれのアタマのなかでは複数のハテナが何度も何度もまわっていた。

「これって・・・」

彼女は、^{めぎつね}女狐のようにほほえむと、襦袢ごと下着を脱いだ。

「う、うそおおッ！！？」

「うそじゃないよ？ふふっ」

めのまえにあらわれたのは、おれとおなじ『アレ』だった。

ぴくぴくとうえにはねながら、そりたっていた、

「き、きみって」

「そう。^{おとこ}男の娘♡」

「だ、だ、だ、だましたなっ」